

三 原 幸 久

ヨーロッパのあるいは世界の昔話、もつと広く口承文芸を研究する上にどうしても参考にしなければならない多くのヨーロッパ文学の古典がある。例えば、ラテン語で書かれたウオラギネの『黄金伝説』やベドロ・アルフォンソの『ディスキプリナ・クレリカリス』、イタリアはナポリ地方語で書かれたバジーレの『ペントメロン』、スペイン中世のドン・ファン・マヌエルの『ルカノール伯爵』、それにギリシア語以下ヨーロッパの各国語訳がある『ローマ七賢人物語』等がそれである。今ここに取り上げようとする『ゲスター・ロマノルム』も、以上挙げた書物に勝るとも劣らない口承文芸研究上必読文献の一つである。

訳者によると芥川龍之介も『黄金伝説』と共に『ゲスター・ロマノルム』を必読の書

としてあげている程であり、文学を志す者が読むべき作品と考えられていたわけではあるが、何しろ完訳と言えるほどのものがなく、ラテン語を解しない一般読者や研究者にとっては、従来はスオーンやフーパーの完全ではない英語訳で読むか、英語訳からほんの一部分のみ重訳された、山崎光子（例の「大工と鬼六」を翻案した水田光）の抄訳が金子健二の和訳で読まなければならなかつた。（筆者も前者を天理図書館で見たことがある。）

この名前ばかりが有名で殆どその全貌が今まで知られていないかった、言わば「幻の大著」が初めて静岡大学の伊藤正義氏の長年の努力によって正典全体一八一話および付録中一九編の合計二〇〇話が和訳された。氏は從来から、大学の研究報告に『ゲスター・ロマノルム』試訳として一部分を発表して來られたが、このたび篠崎書林から八九三頁にもなる大冊として世に出ることになった。まずこの事について口承文芸を専門とする者として心から訳者および、あまり商業的には有利でないこのような大著を世に問われた出版社に対して感謝の言葉を申しのべたいと思う。ただ、出版社の英断に対して感謝の大きい気持ちをもつだけに、この世界的な古典の初の完訳が定価一万円以上の価格をつけないと出版できないほどの少部数しか売れないという日本の現実に憤りを感じずにはおられない。筆者が本稿の冒頭に書いた昔話研究上の必読古典として列挙した作品も、人文書院から出ている『黄金伝説』を除いては完訳をしている人を知つてはいるが、どの出版社もなかなか出版に踏み切る勇気をもたないらしい。本題に戻ると、訳者は以前にも『ゲスター・ロマノルム』ほどではないが、やはり少なからず国際的な説話と関係のあるジョン・ガワーが中世英語で著した大著『恋する男の告解 Confessio Amantis』の和訳を同じ

篠崎書林から昭和五五年に出版している。

この書には『ゲスター・ロマノルム』と共に通する説話もあり、その意味で氏は中世説話

集のベテランというべき研究者である。

「キリスト教的説話集」であり、寓話集に作者ないしは編者の不明なこの作品は中世の文学作品の殆どがそうであるように、ト教的教訓による解説が附加されている。

リスト、聖母や使徒、悪魔や靈魂等に象徴的に解釈される。例えば「ベニスの商人」の原話と考えられる第一九五話「人肉の抵当」では、姫は靈魂、金を借りる騎士は肉体、金を貸した商人は悪魔、裁判官は贖罪師、姫の男装は悪魔との戦闘の決意を、姫の乗る馬は良心と解釈される。このような現代の俗っぽい我々には、時に理解し難いような解釈もある。しかし、この部分こそが恐らく編者が最も広めたかったこの説話集の目的であつたのだろう。しかし、現代の読者に理解し難いからこそ従来の英訳や和訳ではこの部分は殆ど省略されている。

しかし本訳書はこの解釈の部分をも完訳してあり、この作品を正しく理解するのに役立つている。

その解釈の部分を除き説話部分のみを考えるならば、『黄金伝説』が殆ど聖人の伝記集という基本方針から一步も踏み出さないのに比較し、本書はずっと世俗的で伝承的な内容をもつた説話集で、伝説や寓話のみならず、動物報恩譚や笑話、世間話から艶笑譚まで入っている。例えば、第一一二二話「片目（を傷つけた）男の妻」や第一二三話の「シーツを見せる」はどちらもAT一四一九サイクルに属し、『アラビアンナイト』や性典『匂える園』以来のアラビア文学由来の艶笑譚であり、反道徳的だと思われるにもかかわらずこの収集に含まれている。その意味ではかなりアトランダムに説話を集めた収集とも言えるだろう。

た鎧』である。いずれの話でも出発前に騎士は貴婦人に、もし自分が争いで死ぬようなことがあれば、私の武具をあなたの部屋に懸けて、あなたのために命を失った私を思い出してくれと頼んで出陣し、共に戦死し、貴族の依頼は貴婦人によって実行される。しかし、その後の展開は両話では全く異なっている。第二五話では、後に貴族の求婚者を部屋に迎えようとする貴婦人は懸けてあつた騎士の杖と胴乱を取りのけさせらるが、第六六話では、部屋に置いた騎士の鎧を見て、あまたの貴族の求婚者を断る。このように同内容の複数の類話が本書に含まれているのは何もこの話だけではない。後に取り上げる友情を試す物語も、第一二九話の他に『ゲスター』続編の第三三八話(訳出されていない)にあり、また少しモチーフは違うが、ヒキガエルの害から蛇を救つて

蛇が人間に報恩する、我が国の「蛙報恩」の登場人物が逆になるような話が、第九九話「ヒキガエルと蛇」と第一〇五話「告訴の鐘」の二か所に見られる。このように類似した内容の複数の類話があるという事実

は、同一の物語の違つた伝承系統に属する類話がこの収集に組み入れられていることを示し、むしろ編者がこの説話集の編纂にあたつてあまりより好みをせず、むしろでかかるだけ多くの説話を収集するという現代の説話集編集者と同じ立場に立つていたと言えるだろう。このような態度がこの大きい説話集の編纂を可能にし、現代の私達に『黄金伝説』よりも比較説話学的に興味深い中世説話集を残してくれる結果となつたと言えるのではなかろうか。

いま幾つかの説話を取り上げて本書の特徴といつたような点を少し探つてみよう。

この説話集と他の中世説話集との共通に存在する物語は数多いが、一〇六話「夢のパン」もその一つである。この話は、筆者も昨年出版した『ラテン世界の民間説話』の総説に『ディスキプリーナ・クレリカリス』第一九話の「二人の町の人と一人の百姓」を取り上げ、ラジルの口承説話と日本『伊曾保物語』の類話と山形県で本学会員の武田正氏の採集された類話と比較した。しかし詳しく見ると、『ディスキプ

リーナ』以下の筆者の紹介した四話と本書の話とでは微妙な違いがある。本書では、三人の仲間が旅にて食糧がなくなり、パン一個を残すだけになつたので、一人の男が他の二人に、これから眠つていちばん不思議な夢を見た者がパンを食べることにしようと提案し、三人は眠るが、提案した男は他の二人が眠つている間にパンを食べ、その後、他の一人が天国へ行つた夢を、もう一人が地獄へ行つた夢を見たと言うと、その男は、天使が二人の仲間が天国と地獄へ行つてもう帰らないだろと言われ、その景状を夢で見させられたので、起きてパンを食べたと言う。ところが、筆者の紹介した四話は第一は二人のすばしこい町の男と素朴な一人の田舎者、第二は教養のある神父と学生の二人と対立する三人目は教養のない先住民の労働者、第三は二人の男とイソップ、第四では上の二人の兄と末の弟という対立の構図であり、いずれも騙そうと意図した提案者が逆に騙されるという教訓が十分生きて来てる。これに比べると本書の騙そうと思つた者が騙し得たという構

図は説話としては面白さに欠けている。物語の後に置かれた宗教的な解説には、天国に行つた夢を見た者はまちがつた神を信じて天国へ行けると信じるイスラム教徒とユダヤ教徒であり、地獄へ行つた夢の者は俗界の富者・権力者であり、仲間を騙す提案者こそ修道士のような神を怖れる者だとうのはなおさら不自然である。この説話は訳者も示唆しておられるようにイスラム起源だと筆者も考え、この説話のヨーロッパへの窓口はスペインだと思われ、年代的には一三〇〇年頃書かれた本書に比べ、『ディスキプリーナ』は一二世紀の中頃に書かれたと思われる所以で、『ディスキプリーナ』の対立の構図を知つていたならば、こんな改悪ともいべき変更は決して加えないであろうと思われる。

もう一つ別の物語を取り上げよう。本書の第一二九話「友情を試す」は、『黄金伝説』にもあり、また後にイギリスで「エブリマン説話」として広く知られる物語の元となつたであろう物語である。ある王子が旅に出て、自分自身よりも王子を愛してい

る友、自分自身と同じ位王子を愛している友、少ししか王子を愛していない友の三人の友人ができる。父王は友を試すように勧め、王子は豚を殺して人殺しをしたと言つて三人に助けを求める。第一と第二の友は恐れて断るが、第三の友人が罪を着ると言つてくれる。説話の後の解説では第一の友はこの世の、第二の友とは妻子、第三の友とはキリストだと説く。しかしこの『ディスキプリーナ』の第一話「半分の友」では、アラブ人の父親が息子の多くの友を試すために、牛を殺して袋に入れ、人殺しをしたと言つてすべての友を訪ねさせる。息子の友人はみんな断るが、父親が半人前の友だという人は自分の家の庭に死体を埋めるのを手伝つてくれるるので息子は感謝して眞実を打ち明ける。ほとんどの現代スペイン語圏の昔話の類話はこれと同じ筋書きを持ち、韓国とのこの物語もこれと同じ構図である。(我が國の南島におけるこの物語は「兄弟尊重型」ともいうべき別の亞型となるが、それは全く別の問題なのでここでは省略する)この話は、『バルラームとヨサファッ

ト』にもあり、明らかにイスラム起源、と言うよりもインド起源であり、『ディスキプリーナ』が本書よりも先行するにも拘わらず、ここでは本書はむしろ『バルラーム』の類話に似ており祖型に近い感じがある。以上の二話だけで見ても、『ゲスター』と『ディスキプリーナ』の二つの中世ラテン語説話集の間の関係は、どちらがより原型に近いか各話ごとに分析しなければ一語で片付けることはとてもできない複雑な関係にあることがわかる。その意味でも比較説話研究にとってこの『ゲスター』の持つ意義は大きいものと言わなければならない。

なお本訳書には、各話の註に他の古代・中世説話集やシェイクスピアやチョウサーエ等の英文学の作品との関係から、内外の昔話における類話の存在におよぶかなり詳細な比較研究的な解説も備えられており、また巻末にはアルネ・トンプソンの『昔話の型』の話型番号、トンプソンの『口承文芸モチーフ索引』のモチーフ番号、ブリッジズの『イギリス昔話辞典』の話型番号、『日本昔話大成』の話型番号を対照した説

話のモチーフと話型索引が付せられているので説話の研究者にとってはとても便利である。この註の内容を見ると氏の比較説話学における知識の豊かさと目くばりの広さが知れるというものである。

筆者のラテン語の知識がほとんど乏しいので、訳の内容にわたっては何も評価できず、また特にラテン説話の専門家でもないので、『ゲスター・ロマノルム』の紹介に終わつてしまつた感があり、非常に不完全な書評になつたと思うが、この重要な書物の翻訳と出版の事実を説話研究者に紹介したい気持ちからこの書評を書かせて頂いた。機会を与えて頂いた編集部に感謝したい。なお訳者の伊藤正義氏は次に『ディスキプリーナ・クレリカリス』のラテン語からの翻訳に着手しておられるとか聞いている。これまで比較説話研究に価値の高いこの書の翻訳が一日も早く完成することを祈りたい。

(みはら・ゆきひさ／関西外国语大学)